



かわ かみ やす ひこ
川上 泰彦
学校経営コース
准教授

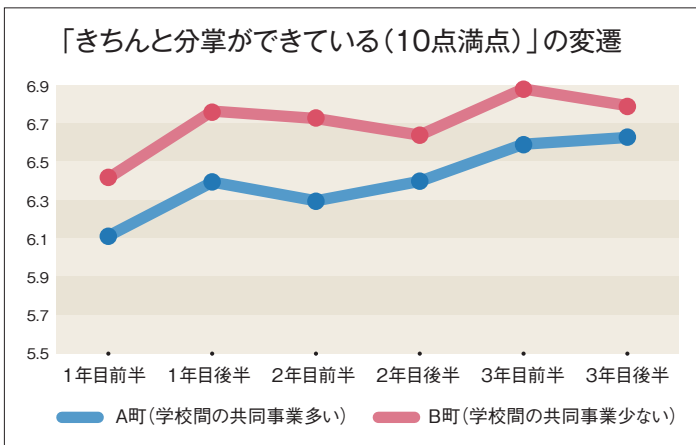
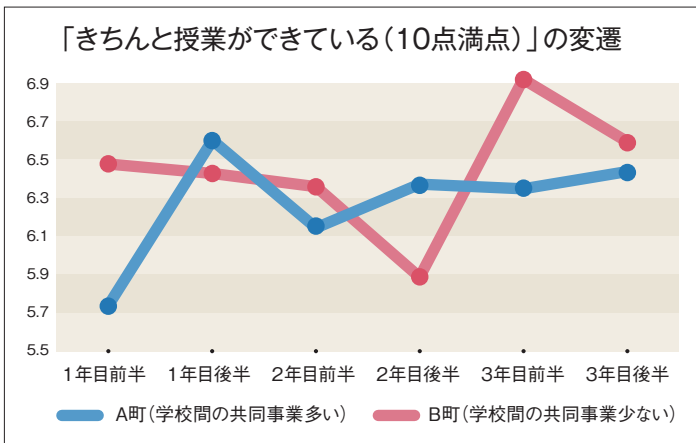
●このページでは日本学術振興会の科学研究費助成事業による助成を受けた研究を紹介し、同助成事業は、全ての分野の「学術研究」を格段に発展させることを目的に、独創的・先駆的な研究に対して助成を行うものです。基盤研究、挑戦的萌芽研究、若手研究などに分かれており、基盤研究は、一人または複数の研究者が共同で行う研究が対象。研究期間は3～5年です。

研究レポート

教員の勤務環境とその変化が職能形成に及ぼす諸影響の解明と実践的対応策の検討

(平成26～28年度科学研究費助成事業・基盤研究Cに採択)

【グラフ】他地域から転勤した教員が、時間の経過とともに職場適応を進める様子



- ▶A町もB町も山間地にあり、互いにほぼ隣接するような地理的環境です。各町内の学校は学年1学級の小規模校ばかりです。
- ▶子どもを相手とする「授業」に比べ、「分掌」の自己評価は安定的に上昇しています。
- ▶町教委が学校間の共同事業を多く実施しているA町では、他の学校の様子を見ることが多いからか、「分掌」についても「授業」についても、B町に比べて全体的に厳しめな自己評価を行っています。「相場観」がつかめる2年目以降については、自己評価が着実に上昇しています。一方、B町では2年目まで試行錯誤する様子が見られます。

今年度からは、これらの知見を学校や教育委員会に説明して教育行政や学校経営の支援を試みているほか、さらに長期的なパネルデータの構築と分析を行うべく、新たな研究を立ち上げています。

この後満足感を高めていること、教育委員会の政策が教員の適応の様子にも影響を及ぼすことなどが分かりました。また、「授業」と「分掌」では適応感の変動が異なることや、適応感を高める上では上司や同僚とのコミュニケーションが重要であることなどが分かりました。こうした全体的な傾向の整理に加え、教員間での適応の差を説明する分析も試んでいます。

公 立学校の先生たちが一定期間ごとに転勤(異動)を繰り返すのは、日本では一般的な風景ですが、国際的にはそうでもありません。また、国内でも地域によって転勤のルールはさまざま、最初に勤務した市町村の中でキャリアの大半を

過ごす地域もあれば、離島や山間地などでの勤務や、転居を伴うような転勤が行われている地域もあります。異動の経験は、個々の先生にとって、新たな適応や能力を発見・伸長してキャリアの展望を開く機会にもなります(職場への「慣れ」は、と

もすると「マナー」にもなり、適性の発見や能力の伸長を妨げます)。一方で、異動のたびに慣れない職場への適応が求められる状況はストレスも生まれやすく、メンタルヘルスの不調が病気休暇・病休の原因になることもあります。このように、

異動が個々の先生に及ぼす影響は、ポジティブ・ネガティブの双方が考えられます。この研究では、①異動を経験した教員はどのように職場に適応するのか、②初任(期)の教員はどのように職業と職場に適応するのかを調査・分析しました。調査

に当たっては、A先生の着任「1年目前半」「1年目後半」「2年目前半」というように、追跡的な形でデータが収集できるよう工夫し、いわゆるパネルデータの構築を試みました。